時間の感覚

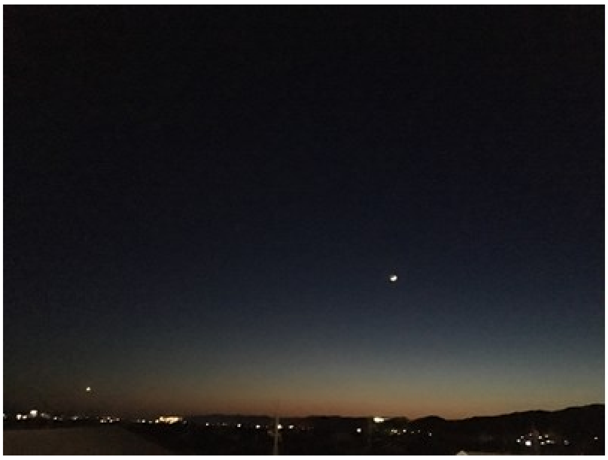
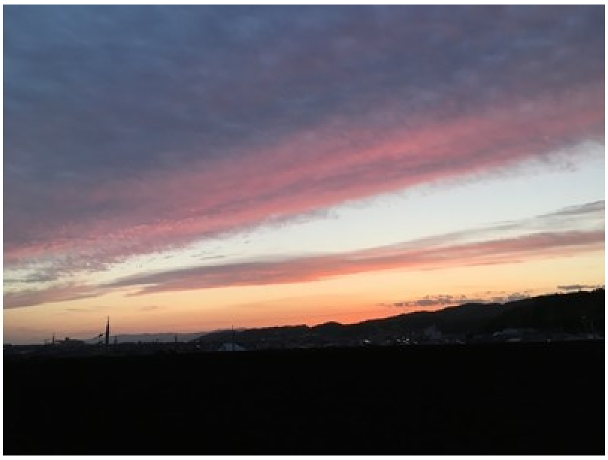
チャン・ミン・アイン・テュ
交換留学生　ベトナム

バイトを始めたばかりの私はある日昼間のシフトに入ったとき「こんにちは」とバイト先の人に声をかけて挨拶したら、「おはようございます」と答えてもらってびっくりした。あれ？昼間なのに、なんで「おはよう」なの？と思った。夕方のシフトに出勤しても、また「おはようございます」と耳にした。なるほど日本ではその日初めて出会った人に「おはよう」を使えるのかもしれないと思いついた。応用してみよう！日本の挨拶文化について分かった気になったと思った自信満々の私は「おはようございます」とある人に言うと、「あなた芸能人じゃないよ」と言われた。芸能世界では朝も夜もこういう挨拶をする習慣になっているそうだからだ。その挨拶から見ると、時間の感覚は国によって異なるかもしれない。一体日本人にとって時間はどう感じるのだろうか。

日本人はいつも何か急いでいるような気がする。毎日学校へ歩いている途中、よく日本人の学生を見かける。私の後ろのはずだったのに、あっという間に遠く追い抜かれた。それは全く追いつけないくらいのスピードである。始業前の時間だったら、急ぐのはもちろんだが、のんびりした時間でも、のんびりしないらしい。どの国でも一日は 24 時間であるはずだが、日本ではそうではなく、一日は 12 時間だけのように思えるほど忙しく、まるで猫の手も借りたいようだ。そして、まだ理解できないことのひとつは日本人には「早い」という言葉は一体どのくらいなのかということだ。例えば、5 時入りのシフトなら、バイト先まで 5 分ぐらい掛かるから 4 時 55 分までに家を出ればバッチリ間に合うだろう。私には 5 時 5 分以内に着くならまだ早いと思うけれど、日本人にはそうではないかもしれない。また、日本人と打ち合わせをした際、約束の時間より早く来ても、いつの間にか待っていてくれた。つまり、日本人の時間の感覚は私のような外国人より早いもの。なぜそのような違いが生まれるのか 2 ヶ月日本に過ごしてもまだ不思議なことである。

一方、ベトナム人にとって時間はゆったり流れているようだ。ホーチミンのような混んでいる都市でも何となくのんびりした生活を送っているような気がしている。日本の朝と言えば、混雑率 200%ぐらいの通勤電車という印象が頭の中に浮かぶ。けれども、典型的なベトナムの朝はのんびりとカフェや食堂などで過ごす風景が印象に残っている。それはぐうたら者というわけではなく、ベトナム人にとって人生とは自由気ままに楽しんで生きることだからだ。そのような理由から、通勤時間でも通学時間でも自分たちの時間を過ごしたいという考え方が多いので、急ぐ必要はないのだろう。例えば、5 時に待ち合わせをしたのに、5 時 10 分か、50 時半までに出発するであろうことはと言うまでもなく分かっている。言わずと知れたことだから、遅れても平気だと思う。なぜ許されないほど遅れても平気なのかと言うと、相手も遅れるから自分が遅れるのは当然で怒られないので、謝らなくてもいいと考えているからだ。このような状態を表す日本語は「お互い様」で「両方とも同じ立場や状態に置かれていること」だ。おそらくベトナム人ののんびりしたような時間の感覚はそのような理由があるからかもしれない。

なぜ日本はベトナムと劇的に異なるのか、日本人に聞いてみようとした。日本人は幼い

頃から「ルールは何か」「なぜルールを守る必要があるのか」「ルールを破ったらどうなるか」などを教えられてきた。ルールの中では時間の規則は非常に大切だ。時間を守らないことは信頼を失うことにも繋がるので、時間を守れば約束を守ると思う。それに、日本人の特徴は集団主的と言うことであり、あらゆる個人よりも集団での価値を優先することにあると思う。だから「他人に迷惑をかけたくない」「自分が待っても相手を待たせたくない」と言う考え方が一般的になっているらしい。これまで私が抱いていた質問に、やっとその答えが見つかった気がした。時間の感覚の違いは文化または習慣の違いであって、日本人はいつも急いでいるわけではないことが分かってきた。やはり文化と習慣の要素は国の特徴に強く影響を与えると言える。留学生としては色々な国の人について調べ、なぜそのようなことがあるのか確かめることは面白い。

　日本人の人生は守らなければならない規則が非常に多いので、日本人に「そんな人生は疲れないですか？」と聞いたら、「初めから決まっているから疲れない」と答えてもらった。けれど、いつも通りではなく景色が綺麗な道ならば、少し遠く、時間がかかっても歩きたいような私にはやはりマイペースのままでいたいのだ。人生は瞬きのように瞬間的なものだから、ゆっくりと過ごしたいと思う。一方、人間関係においてお互いの信頼は非常に大切なので、日本人のように時間を守ることを学びたい。一年後の私はどうなるのか楽しみにしている。